

2020年6月

聖句随想・折々の言（ことば）

「パウロとテモテ そして私たち」

牧師 森 言一郎

人は実にちいさなことで、こころ持ちが変わるものです。誰かが痛いところにそっと手を置いてくれるだけで（手当て）その痛みを忘れてしまうことがあります。あるいは、お医者さまが、うんうんと深くうなずいて話を聴いてくださって、「森さん、痛いだらうけれど、出来る限りのことをしてみますからね。諦めないで、一緒にがんばりましょう。」等と言ってくださるならば、ただそれだけで、心強く、一人じゃないんだ、と元気になったりする。

*

私は牧師として、実にしばしば、皆
さんにお見せできない位に、落胆
し、嘆いたり、落ちこんだり、ほんのち
いさなことで嬉しくなったりしながら過
ごしていることがある、本当に小さな器
の伝道者です。2020年度の定期教会総
会の牧師報告の中に、「奮闘努力のかい
もなく」（寅さんの映画を観たあとでし
た）と新年最初の礼拝説教の中で嘆いた
ら、そのあとから、なぜか新来会者がぼ
つぽつと与えられ始めたことを記しまし
た。尊敬する伝道者・春名康範先生のご
本にある通りで、「あー、神さまは居ら
れるだなぁ」と牧師のくせに思うのです。

ちいさなことで一喜一憂するなんてことは、自慢にもなりませんし恥ずかしい。でも、本当です。

*

今回記そうと思っている、パウロという伝道者がテモテという青年を見いだしたことが使徒言行録 14 章に隠されていることに気付いたのは 2020 年 5 月 3 日の礼拝説教の準備をしていた時でした。その時の私は、大いに勇気づけられましたし、素朴に嬉しかったのです。それはなぜだろうか、改めて考えてみました。パウロは『第二コリント書 12 章』で「むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」「弱い時にこそ強い」と語

ったりする人です。

そんなパウロの、その後の人生を支える力になったのが「テモテ」だということ
を少しオーバーですが私は自分で発見出来た時、何とも言えない喜びとなったのです。パウロにとって、テモテが最初は、どれ程の働きをしてくれるか全く分からないような青年だったのにも関わらず、のちに、パウロの右腕か分身のような存在になっていった運命的な（キリスト教の世界では「運命的」等という言い方はあまり使いませんが、そう思うのです）
出会いの中に、神のみ業を思わずにはいられなかったのです。

*

使徒言行録 14 章には、パウロがバルナバと共にシリアのアンティオキアの教会から送り出されて出掛けていった〈第一次伝道旅行〉の終盤の日々が描かれます。舞台は現在のトルコで、中でもリストラという町に滞在中にパウロは「青年テモテ」と出会っているようです。

＊

第一次伝道旅行の終わり迄は、陰に日なたにパウロを支えていたのはバルナバであったことは明らかです。しかし、使徒言行録 15 章のエルサレムでの公会議を経て〈第二次〉の旅が始まろうとする時に、パウロとバルナバは、こ

の先の伝道を誰と一緒に取り組むかについての話し合いで激しく衝突し、別々の道を歩き出します。エルサレム教会に知られていなかったパウロにとって、身元引受人のような存在でもあったバルナバとの訣別は、決してちいさなことでなかったはずです。

＊

パウロは、バルナバの代わりにおそらくエルサレム教会から推薦されたであろう「シラス」と共にエルサレムから第二次伝道旅行に旅立ちますが、のちに、バルナバやシラス以上の存在となっていくのが「青年テモテ」でした。その証拠に「テモテ」は、その後パ

パウロが各地に送った「第二 コリント書」
「フィリピ書」「コロサイ書」「第一・第二
テサロニケ書」「フィレモンへの手紙」
の最初の挨拶で、パウロと連名でその名
が記録されるようになる人物です。

それだけでなく、パウロが記した「喜び
の書簡」とも呼ばれるフィリピの信徒へ
の手紙2章で、テモテをいかに信頼し、
愛していたかが伝わってくる一文があり
ます。「テモテのように私と同じ思いを
抱いて、親身になってあなたがたのこ
とを心にかけている者はほかにいない。他
の者は皆、イエス・キリストのことでは
なく、自分のことを追い求めているが、
テモテが確かな人物で、息子が父に仕え
るように、彼は私と共に福音に仕えた。」

と紹介する程なのです。

*

し かしながら、使徒言行録 14 章の
リストラでの伝道の時に、「テモ
テ」の姿は表には出てこないのが聖書の
面白いところでは。第二次伝道旅行が始
まって間もない 16 章の冒頭で、パウロ
はリストラに暮らしていた「評判のよい
テモテ」を伴って、ヨーロッパ伝道に赴
くことになることがようやく明らかにな
ります。

そもそも、テモテとパウロの出会いは、
パウロ自身が記した『テモテへの手紙
第二』の 1 章の冒頭部分などから想像す

ることが出来ます。私は早い時期にキリスト者となったテモテの母エウニケと祖母ロイスという婦人たちの元に、パウロとバルナバが住み込みで世話になったことが切っ掛けだったと考えます。母がユダヤ人、父はギリシア人といういささか複雑な家庭環境に育ったのがテモテでした。テモテの父親の名が聖書に出て来ないのは、おそらく早くに亡くなったからだと思うのですが、パウロとバルナバというおじさんたちは、テモテにとって頼もしい大人に見えたことでしょう。

*

そんなテモテの人物像を少しご紹介します。テモテの性格は決して逞

しいというわけでもないのです。とりわけ、『テモテへの手紙 第二』はパウロがテモテをどのように思っていたかを様々な教えてくれる書で興味深い。パウロがテモテを心配し「神が私たちに与えてくださったのは、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮の霊だ」と奮起を促す記述もあります。どうやらテモテは気がちいさく、くよくよするような面もあったらしい。また「あなたの純粹な信仰」と言っている箇所もあります。これは、裏を返せば、テモテが純粹すぎて悩むことも多かったことを意味するのではないのでしょうか。

＊

しかしパウロは、このように気弱で

臆病だったテモテをいつしか頼りにするようになったのです。前述の第二テモテ書は獄中書簡の一つですが、獄中という孤独な状況の中で、パウロは「ぜひあなたに会って、喜びで満たされたい」「何とかして、冬になる前に来てください」記します。それらの言葉が意味することは、単に用事があるからというのではなく、「テモテよ、私はあなたを通して励まされ、慰めを受けたい」というパウロの心の奥底にある心情です。パウロとテモテの、何とも不思議な関係がそこには形作られていったのです。

＊

我々が礼拝で読んだ使徒言行録 14 章

では姿がまだ見えない青年テモテは、リストラ周辺でイエス・キリストの福音伝道のために日夜奮闘するパウロとバルナバの様子をドキドキ、はらはらしながら見守っていたのだらうと思います。パウロが生まれつき足の不自由な人を癒した事、それにまつわる町中を巻き込む大騒動を静め、天地万有の創り主なる神についての説教などなど。年若く純真なテモテの心にどれもが深く焼き付いたはず。そして、石を激しく投げつけられて〈パウロは死んだ〉と誰もが思った場面で、傷みを負いながらもパウロがすくっと立ち上がったその時に、テモテは他のクリスチャンたちに交じって立ち会っていたはず。はずです。

*

リ ストラで迫害を受けながらも、パウロが少しも臆することなく勇敢に伝道を続けたことは、青年テモテに大いに影響を与えたはずです。そして、それ以上に、パウロにとっては、テモテという年若いクリスチャンの日々の成長ぶり、さらに、彼が遠くに居ても、近くに居ても、獄中に於いても、それから先、いつも大きな支えとなっていたのです。

*

神さまの愛は、伝道者パウロにこのような不思議な出会いの中でも示

されていきました。その愛が、今、大きな時代の転換期になることを伺わせている「新型コロナの騒動」の中で、ただひたすら、福音を分かち合いながら、共に生きていこうとしている私たちに、注がれていないはずがありません。

伝道者であり牧師である私は、きっと、どなたかのお名前を連ねて手紙を書こうとしているのです。end